

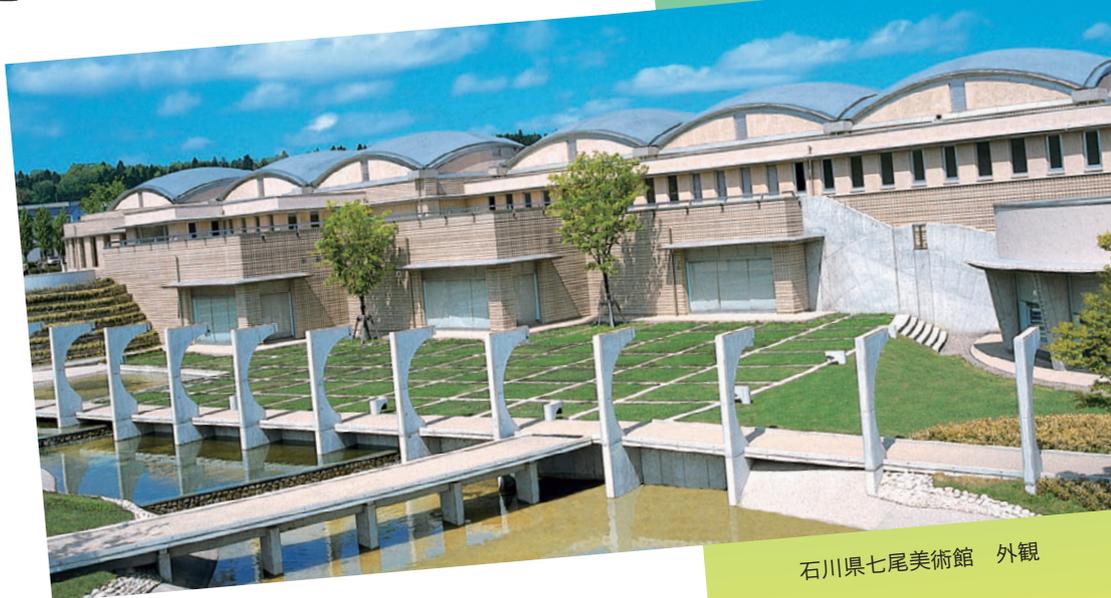
石川

ISHIKAWA PREFECTURAL
MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No. 148

2024.10.10



石川県七尾美術館 外観

令和6年能登半島地震復興応援特別展

七尾美術館

in れきはく

石川県立歴史博物館 外観



2024年

10月19日(土)

11月17日(日)

七尾美術館

in れきはく

2024年10月19日(土)→11月17日(日)

【開館時間】9:00~17:00 (展示室への入室は16:30まで)

能登地区唯一の総合美術館である石川県七尾美術館は、平成7年(1995)の開館から約30年、能登の文化活動の拠点施設として広く親しまれてきました。しかしながら、同館は令和6年1月1日の能登半島地震により建物・設備に被害を受けて臨時休館中となっています。

本展は同館と石川県立歴史博物館が共同で企画するもので、七尾美術館の所藏品および寄託品を3つのテーマで広く紹介します。七尾美術館が地域との関わりの中で大切に守り伝えてきた作品群が金沢で一堂に展示されるのは初めてのこととなります。その魅力に触れ、能登の豊かな歴史・文化を再確認する機会となれば幸いです。

What's 七尾美術館?

能登地区唯一の総合美術館として平成7年にオープン。「池田コレクション」や能登ゆかりの美術工芸品を中心に収蔵・紹介しています。開館の翌年から毎年「長谷川等伯展」を開催するほか、「イタリア・ポーロニャ国際絵本原画展」や「現代美術展 七尾展」、浮世絵展など幅広いテーマの展覧会を実施しています。



1章

「伝えゆく池田コレクションの逸品たち」

やきものや漆工、近現代作家による日本画や彫刻など幅広いジャンルで構成される「池田コレクション」。ここでは現在289点が収蔵されている同コレクションより、選りすぐりの優品を紹介します。

What's 池田コレクション?

七尾市出身の実業家・池田文夫氏(1907~87)が生涯かけて収集した美術工芸品のコレクション。氏の没後これらが七尾市に寄附されたことが美術館設立の大きな機運となったことから所藏品の中核として位置づけられています。



織部鮑形向附 桃山時代(17世紀)

「織部」は美濃国(現・岐阜県)で制作された美濃焼の一種。造形や文様の奇抜さが特徴。本作はアワビを模った向附(茶事などで使用される懐石道具の一つ)。波やサザエのような文様も描かれ、「海尽くし」といった趣がある。

2章

「長谷川等伯と能登の文化」

七尾出身で桃山時代に活躍した長谷川等伯（1539～1610）は、七尾美術館の重要な展示テーマの一つです。ここでは、等伯の若い頃の仏画をはじめ、等伯を育んだ「能登畠山文化」や能登地域に伝わる文化財を紹介します。



愛宕権現図

室町時代（16世紀）長谷川 信春（等伯）（1539～1610）筆
石川県指定文化財（画像は部分）

愛宕権現は火伏せの神。本地仏は勝軍地藏で、鎌倉時代以降は特に武将から篤く信仰された。本作は火焰の背にして甲冑を身に付け、右手に2本の戟を持して左手に如意宝珠を載せ、葦毛の馬に騎乗する勇ましい姿で描かれている。画面右下に「信春」袋形印が捺されており、手などの表現から30歳代前半頃の制作と考えられる。

What's 長谷川等伯？

天文8年（1539）七尾の武士の奥村家に生まれました。その後染物屋の長谷川家に養子に入り、はじめは「信春」の名で絵仏師として活躍。33歳頃に活動の拠点を京都に移し、画技を磨きます。また、一流の文化人と親交を深め、狩野派に対抗して名声を高めました。日本水墨画の最高傑作、国宝「松林図屏風」などの名作が伝わります。



刺繍阿弥陀三尊像

平安～鎌倉時代（12～13世紀）
重要文化財 七尾市・西念寺蔵

絵画のように見えて実は刺繍によって表現された「繡仏」と呼ばれる作品。濃紺・青・緑・黄・赤など多彩な色糸を駆使したグラデーションが美しく、専門の工人の手によるものと考えられる。この時期のものは類例が少なく貴重。

3章

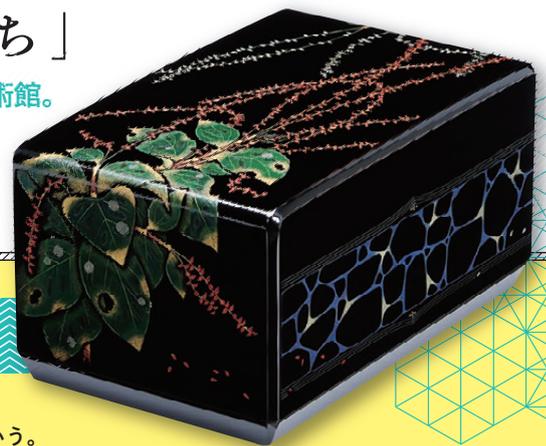
「能登ゆかりの現代作家たち」

「能登ゆかりの作品」を収集展示の基本方針とする七尾美術館。ここでは能登出身・在住の作家や、能登の風景をテーマにした現代作品をセレクト、豊かな能登の土壌が生み出した作品の数々をご鑑賞いただけます。

沈金彫水引草飾箱『古城尔而』

平成21年（2009）
山岸 一男（1954～）作

七尾城址をテーマにした飾箱。城跡にひっそりと咲く紅白の水引草と野面積みの石垣を、「沈金象嵌」の技法を駆使して表現する。亡き父と同所を訪れた際の思い出が創作のきっかけという。



特別展の関連イベントについては
裏表紙の「催し物案内」をご覧ください。

石川県七尾美術館の歩みと 震災について

石川県七尾美術館 次長（学芸員） 北原 洋子

当館や七尾を応援してくださる方、
ご来館くださる人々に支えられ、今がある

当館は、ご寄附いただいた「池田コレクション」を保管管理し公開することと、能登七尾出身の絵師・長谷川等伯の展覧会を開催することを大きな2本柱として建設の気運が高まり、平成7年4月に能登唯一の総合美術館として開館しました。

当館収蔵品の中核となる「池田コレクション」は、特集ページでもご紹介しましたが、様々な美術工芸品289点で構成されています。また、石川県出身、ゆかりの作家や関係者からも多くの作品や史料のご寄附を受け、現時点で（本年3月末）所蔵品は821点となっています。

さらに忘れてはいけないのが、約100点となる寄託品です。周辺の寺社や個人などからお預かりしているものには、長谷川等伯や長谷川派の作品をはじめとした指定文化財も多く含まれているのです。

通常当館では、所蔵品や寄託品を紹介する所蔵品展、石川県最大規模の公募展「現代美術展」の七尾展、県内の文化財などを紹介する秋の企画展、そして春は「長谷川等伯展」、夏は浮世絵やデザイン、写真など様々な内容、秋は「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」と、3つの特別展を開催しています。展覧会以外にも様々なイベントや貸館・貸しホール事業も行っています。開館10周年の「長谷川等伯展」では、等伯の代表作で日本水墨画の最高傑作とされる国宝「松林図屏風」を、東京国立博物館のご協力を得て2週間だけ特別公開を果たし、当時約6万人都市で5万7千人の来館者数を記録しました。

さて、そんな当館は来春開館30周年を迎えます。コロナ禍で臨時休館を余儀なくされたりもしましたが、準備を始めていた矢先、未曾有の出来事に襲われたのです。

想像を絶する能登半島地震と、そこからの学び

今年1月1日、当館は年始休館中でしたが、所蔵品のほか一部寄託や借用作品も展示していました。16時10分に地震発生後、ガタガタの道を通って美術館に到着した時の、鳴り響く非常ベルの音が今でも耳に残っています。安全性を確認しながら展示室へ向かいました。陶磁器などは助かったものの、残念ながら一部彫刻作品が展示台から転倒し、破損していました。記録写真を撮影し、動かせるものは安全な場所へ移動しました。外では「津波が来ますので高台へ…」という放送がずっと繰り返され、まだ大きな余震もあったので、

館内をサッと撮影して回った後、一旦家族のもとへ。しかし、家もかなりの被害で危険なため、高台のコンビニ駐車場で車中泊となりました。翌日、金沢から駆け付けた学芸員と収蔵庫へ入り、確認作業を行いました。エントランスホールや浄化槽なども被害があり、4日には出勤可能者が集まり、それぞれ持ち場の状況を報告しました。学芸員は出品者、関係者などに連絡、しばらくは電話やメール対応に追われました。さらに、3月末までは作品の点検と修理依頼、一部作品移動などを、黙々と続けました。

4月から美術館周辺もほとんど通水し、5月からようやく個人宅や寺院の文化財レスキュー、学校への出前授業ができるようになりました。とは言え、当館はこれから再開に向けて建物などの復旧工事、枯らし期間（工事終了後にアルカリ成分やガスなどを抜く整備期間）が必要で、まだまだやることがあります。11月に京都で開催されるミュージアムフォーラムでは、この経験談を発表してきます。受け身ではなく、この経験を学びに変え、活かし、伝えなくてはなりません。

危険、さらには猛暑の中、全国からレスキューに参加いただいている学芸員や博物館関係者には、この場をお借りして本当に感謝申し上げます。電気がつかない崩壊した寺院や家屋で、汗だくになって梱包・運び出しをされている方の中には大先輩の顔もあり、本当に泣けてきました。奥能登の人たちを思うと、まだまだできることがある、頑張らねばと心に誓いました。

さて、特集ページでもご紹介させていただいていますが、今回石川県立歴史博物館から移動展のお声掛けをいただき、本当に有難いです。石川県立美術館も、企画展で被災した当館や和倉温泉から作品を出品、特別陳列でも能登の作家作品を展示されたり、県の協力体制にも感謝です。この経験から学び、来秋頃の再開を目指して皆様をお迎えできるよう準備を進めてまいりますので、温かく見守っていただけましたら幸いです。



能登半島地震によせて

2024年9月に発生した能登半島における大雨災害によりお亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被害にあわれました皆様に心よりお見舞い申し上げます。「令和6年能登半島地震」による傷が癒えぬ中の更なる困難に対し、当館員一同、地域社会のために何ができるのかという課題に改めて立ち返り、被災文化財の保全に全力を尽くす決意です。

今号の『石川れきはく』では、前号・前々号に引き続き災禍における文化財レスキューの現在を特集いたします。発災直後より被災文化財の救援活動を牽引してきた独立行政法人国立文化財機構文化財防災センターの文化財防災統括リーダー・小谷竜介氏による特別寄稿とともに、文化財レスキューに取り組む当館学芸員の所感をお届けします。

地域の文化を守るために —文化財レスキュー事業の取り組み—

国立文化財機構文化財防災センター 文化財防災統括リーダー 小谷 竜介

令和6年能登半島地震が発生し、9ヶ月が経過しました。最大震度7の地震が残した爪痕は、まだまだ現地に深く刻まれています。甚大な被害は能登半島、そして石川県各地に伝えられてきた文化財にも及んでいます。こうした被害の状況に鑑み、文化庁では美術工芸品ほか動産の文化財等を対象にした文化財レスキュー事業と、歴史的な建造物を対象とした文化財ドクター派遣事業の実施を決めました。我々文化財防災センターは文化庁より委託を受け、この二つの事業の事務局を務めさせて頂いております。

文化庁の二つの事業は、文化庁が直接扱う国指定等の文化財以外、すなわち県や市町による指定文化財から未指定文化財までを対象に、一つでも多くの被災した文化財が失われることなく、復興後に伝えていくための事業となります。

文化財レスキュー事業、正式には能登半島地震被災文化財等救援事業は、美術工芸品など動かせる動産の文化財を対象とした事業となります。地震により被災した文化財を、危険な場所から救出し、安全な場所に運んだ後に、それ以上悪くならないように応急処置を施し、一時保管場所で、復旧復興が進み、元の場所にお戻しできるようになるまでお預かりをいたします。こうした取り組みは、1995年の阪神・淡路大震災以来、大きな災害が起こると実施されてきました。

能登半島地震では、個人住宅から社寺まで多くの建物が倒壊するなど、建物に多くの被害が出ました。

動産の文化財を対象とする文化財レスキュー事業では、こうした倒壊した建物内からの救出活動が中心となっており、なかなか救出活動が進まない原因となっています。

2024年8月段階で所有者より要望をいただいた救援リストには230を超える救出対象が載せられています。東日本大震災で千葉県から岩手県までの5県の総件数が99件でしたので、被害の大きさを知ることができます。同時に、多くの人が自宅に残された「大切なもの」を気にしているということも示しています。

被災地でお話しを伺うと、多くの方が自宅そして身の回りの文化・文化財に気を掛けていることが印象に残ります。私たちの文化財レスキュー事業は、被災した文化財の一つでも多く後世に伝えるための取り組みになります。それは、文化財が貴重なものであるからと言うこと以上に、文化そして文化財が地域の人たちの誇りと生活の一部となっているからです。能登半島地震の被災地における今回の文化財レスキュー事業もそうした事業の目的が被災地で求められていることを確信する機会になっています。

現地での活動はまだ続きます。また、お預かりした資料の整理作業なども行う必要があります。こうした作業には、文化財の専門家だけでなく多くのお力を頂く必要もごございます。皆さまにもご協力頂く機会があるかもしれません。そうした際はよろしくお願いたします。多くの皆さまのお力を頂き、一つでも多くの能登の文化を後世に伝えていきたいと思っております。

地域の歴史を 「伝える」ということ

学芸主任 野村 将之

能登半島地震の発災から半年以上が経過しました。梅雨入り以降は気温や湿度が上昇し、文化財レスキューも現地での救出活動に加えて、救出した資料の保管環境の整備や応急処置も大きな課題となっているように感じます。

さて、少し前のお話になりますが、5月に実施した個人宅の文化財レスキューでは、19世紀に能登地方で焼かれた「正院焼」の作品を拝見する機会がありました。正院焼の製品は奥能登を中心に伝わっているのですが、珠洲市内にあったとみられる窯跡については現在も場所が分かっておらず、謎の多い焼きものでもあります。今回の作品には、「正院にきた陶工が、試し焼きをした作品」という興味深い伝承がありました。こうした「地元ならではの」資料には伝承や、民具の場合には使い方など「文字として残されていない」情報が所蔵者によって残されており、その資料が持つ価値を高めています。しかし、災害時には資料そのものはもちろん、資料に結び付けられていた情報も失われる恐れがあります。

また、今回の震災によって被害を受けた文化財は、古文書や美術品、民具などの「モノ」だけではありません。古墳や横穴墓、中世城館などの遺跡についても大きな被害を受けていることが、各市町や地域の研究会の調査によって確認されています。家屋の中にある文化財とは異なり、救出や一時保管などの要望には上がりにくいですが、こうした部分にも目を配る必要があると思います。

家屋などの中にある文化財や遺跡だけではなく、それらがどのように伝わってきたか、どんな伝承があるかなど、地域の住民が持っている情報があつてこそ、地域の歩みを物語るものになると思います。解体や修理がまだの家屋も多く見かけるなかで無力感を覚えることもあります。地域の方が身近な文化財を気にかけてくださること、そしてレスキューを終えた後の依頼者の安堵の表情に、逆に救われているのが正直なところ。避難生活や住居の解体・再建、ところによっては集団移転など、現地の課題は多岐にわたりますが、文化財レスキューの活動が被災地の復興へ向けた次のステップに進むための手助けになっていれば幸いです。

関心の輪を広げる

学芸主任 中村 真菜美

令和6年能登半島地震の発災から9ヶ月がたちました。9ヶ月を総括できるような心境では到底なく、文化財レスキューという予想外の出来事に手探りで向き合っている内に、時間が過ぎたというのが正直なところ。文化財を無事に救出できた時の達成感や、所有者の方々とコミュニケーションを深められた時の充実感は大きなものである一方で、東日本大震災や平成28年熊本地震と比べてもボリュームが大きいとされ、複雑な案件も多い現状に弱気になったり、多くのエキスパートの中で自分の力不足を痛感したりしています。

そうした中、今年度より私は普及課に配属され、文化財レスキューを「伝える」という課題に向き合うことになりました。被災者のみなさんが文化財レスキューという取り組みを認知し、相談につながってもらえるように、また被災者以外の方にも被災文化財を取り巻く状況を知ってもらい、文化財保護や防災に理解を深めてもらえるように、広報・普及啓発の果たすべき役割は大きいと思っています。

今年度からは広報誌『石川れきはく』にて特集「令和6年能登半島地震によせて」を開始し、当館の友の会・れきはくメイトの会員誌では「文化財レスキューの現場から」と題した連載を行うほか、当館のX(旧Twitter)での発信も進めています。これらに力を入れることは、第一の目的である多くの人の関心のアンテナにひっかかることだけではなく、職員が文化財レスキューに対する自分の考えをまとめ、地域のために自分が、そして当館がどのような存在であるべきかを見つめなおすことにもつながっていると考えています。

文化財レスキューの第一線で活躍する各市町では発災直後から情報発信が盛んで、救出された資料を実際に展示する取り組みも行われています。当館では7月中旬から第2棟1階のギャラリースペースにて「令和6年能登半島地震によせて」と題したパネル展示を始めたところですが、市町の取り組みを勉強させてもらいながら、「伝える」という課題に真摯に向き合い、関心の輪を広げるきっかけづくりに努めたいと思っています。

歴史資料とは何かを 問いながら

学芸員 吉田 朋生

地震の影響がまだまだ各地に大きな爪痕を残す中、被災した文化財を後世に残すための取り組みとして文化財レスキューが継続されています。学芸員として活動に携わる中でそれが地域の文化の継承へと繋がればと願っています。ただし、何が「文化財」なのか、明確な基準はありません。私が担当する文献資料の場合、有名な武将の書状のような、いわゆる古文書に限らず、人々が生活の中で書き残したものは、その土地の「記憶」を後世に伝える歴史資料となり得ます。

震災後、歴史分野の学芸員として被災地のために何かできることはないか、もどかしさを感じていた中、ご自宅から出て来た古い資料に関するお問い合わせが多数寄せられたことは有り難いことでした。例えば、「破れた襖の中から墨で文字が書かれた紙が出てきました」というお電話を度々頂いています。襖や屏風を仕立てる際に補強のために貼り重ねられた下張り文書は、当時の人々が反故紙として廃棄したのですが、その場所にしか残らない情報が書かれていることもあります。現物を見てみなければその貴重性を判断できない場合が多いので、まずはメールや郵便で画像をお送り頂き、その後現地に伺う場合もあります。4月末にお伺いした珠洲市宝立町の個人宅の襖から発見された古文書の一部は、あまり資料が残っていない江戸時代の宗玄村に関わるものでした。

このように、歴史的な価値がまだまだ定まっていない資料が発見された場合、通常時は、調査を行い資料の性格を見極めますが、レスキューの現場ではそうした猶予がない場合も少なくありません。一定期間、資料をお預かりする「文化財レスキュー事業」は、ご所蔵者にとっても、博物館にとっても、考える猶予を与えてくれるものです。ただし、保管場所が無限にある訳ではないため、お預かりする資料を現地で選別することが避けられない場合もあります。私自身、文化財レスキューに携わる中で、資料を見る目を養う必要性を痛感しています。引き続き、歴史資料とは何かを問いながら、地域にとって大切な文化財の継承に取り組んでいきたいと思っています。

当館の主な文化財レスキュー活動状況 【7月～9月】

| 期 日 | 曜日 | 活動内容 |
|-------|----|---|
| 7月 1日 | 月 | 珠洲市 寺院 文化財防災センター (以下、文防) レスキュー参加 |
| 7月 2日 | 火 | 珠洲市 寺院 文防レスキュー参加 |
| 7月 3日 | 水 | 珠洲市 一時保管施設 文防レスキュー参加 |
| 7月 4日 | 木 | 珠洲市 寺院 文防レスキュー参加 |
| 7月 9日 | 火 | 志賀町 個人宅 文防レスキュー参加 |
| 7月19日 | 金 | 当館ギャラリーで速報パネル展 「令和6年能登半島地震によせて」を開催 |
| 7月23日 | 火 | 珠洲市 一時保管施設 環境整備 中能登町 個人宅 レスキュー |
| 7月26日 | 金 | 七尾市 個人宅 現地調査 |
| 7月31日 | 水 | 輪島市 個人宅 (2件) レスキュー |
| 8月 2日 | 金 | 川北町 個人宅 レスキュー (珠洲市からの避難資料) |
| 8月 6日 | 火 | 珠洲市 一時保管施設 文防レスキュー参加 |
| 8月 7日 | 水 | 珠洲市 一時保管施設 文防レスキュー参加 |
| 8月 8日 | 木 | 珠洲市 一時保管施設 文防レスキュー参加 |
| 8月 9日 | 金 | 珠洲市 一時保管施設 文防レスキュー参加 |
| 8月29日 | 木 | 羽咋市 曳山倉庫 レスキュー協力 いしかわ歴史資料保全ネットワーク (以下、いしかわ史料ネット) の協力による 被災古文書の整理作業 |
| 8月30日 | 金 | 金沢市 神社 現地調査 |
| 9月 9日 | 月 | 志賀町 神社 現地調査 |
| 9月10日 | 火 | 七尾市 寺院 現地調査 |
| 9月11日 | 水 | 金沢市 個人宅 現地調査 (輪島市からの避難資料) |
| 9月12日 | 木 | 珠洲市 個人宅 現地調査 かほく市 個人宅より被災資料受入れ |
| 9月21日 | 土 | 七尾市 個人宅 レスキュー |
| 9月22日 | 日 | いしかわ史料ネットの協力による 被災古文書の整理作業 |
| 9月26日 | 木 | 七尾市 個人宅 現地調査 |

文化財レスキューとは

地震で被害を受けた、もしくは倒壊しそうな建物に残された「文化財」の救出避難・応急措置・一時保管を実施する事業です。石川県では国の文化財防災センターと連携して学芸員らによるレスキュー隊を編成しており、当館も県立博物館として活動にあたっています。

なお、ここで言う「文化財」とは、地域の歴史を伝える有形文化財や有形民俗文化財を指しますが、指定の有無は問いません。

